

## 石田の杜に帰って

奈良県へ移り住んで六年目になります。生まれ育った京都、暮らしている奈良、どちらも私にとって大切な場所です。

今年の夏、久しぶりに母の実家がある京都市伏見区の石田へ帰りました。地下鉄東西線の石田駅ができてから随分と便利になりましたが、それ以前はバスの乗り継ぎに時間をかけていたことが思い出されます。

幼い頃のことを懐かしく思い起こしながら、天穂日命神社へ立ち寄りしました。地元では「お宮さん」と呼び親しまれていますが、鬱蒼とした境内が薄暗いため、祖父から「一人で رفتらあかん」とよく注意を受けていました。

この神社は、『万葉集』の「石田の杜」に比定されています。石田を詠ん



だ歌は四首ありますが、そのうちの二首はつぎのとおりです。

宇合卿の歌三首（第一首は省略）

山科の石田の小野の柞原 見つ

つか君が 山道越ゆらむ

山科の 石田の杜に 幣置かば け

だし 吾妹に 直に逢はむかも

（巻九—一七三〇—三二）

藤原宇合が詠んだ歌で、『万葉集』

雑歌の部立に収められています。雑歌

には旅の歌が多く、この二首もそれに類しています。一首目は家に残された女性の気持ち、二首目は男性が再び女性に逢うことを願う気持ちが詠まれています。石田を起点に互いを思いやっています。石田を起点に互いを思いやう点が面白く感じられます。

古代の石田は大和と近江とを結ぶ交通の要衝でした。そのため『万葉集』には「石田の杜」に旅の無事を祈る歌がみられるのでしよう。石田を詠んだ残り二首（巻十二—二八五六、巻十三—三二—三三六）にも、「石田の杜」へ幣を奉ることが詠まれています。

友の会では平城宮から平安宮を目指す記紀万葉ウオークを今年度からスタートさせました。まだ木津川を渡ったところですが、これを機に奈良と京都、それぞれの魅力に気づいていければと思っています。

（万葉文化館主任研究員・小倉久美子）